

# デリヴランドの黒い聖母～伝統と崇敬の歴史

On the "Vierge Noire" of Délivrande (Normandie, France)

安發 和彰

AWA Kazuaki

At Tsuruoka Catholic Church, in the basilica, a wooden statue of Virgin Mary with Infant Christ has been an object of veneration for the faithful and pilgrimages since 1903. The statue, faces of Mary and the Son both are painted in dark-brown, is one of 6 copies (ca.1895) from the original work, "Vierge Noire=Black Virgin" of Délivrande (Normandie, France), curved in stone, very famous in France and England since 13<sup>th</sup> century. In following papers, on the "Vierge Noire" of Délivrande, based on a field survey of mine (2007, 2008) and data for investigation, first I would like to guess an enigma concerning the origin of "Vierge Noire" in France. Secondly, I focus on the "Vierge Noire" of Délivrande, regarding a history from the beginning of the town Délivrande and the statue, then I discuss on that the statue would have been originally a type of Romanesque-Maestà (strictly seated) (ca.1030/1130), but after demolished by a group of Protestantism (1561), it was restored in a new Normandie-Gothique style (standing, employing a posture "déhansée" and childish movement of Infant Christ). Lastly, I shall describe the scene of "procession" in the Couronnement-ceremony at Délivrande (16. Aug. 2008).

## はじめに

本稿は、山形県庄内地方鶴岡市の鶴岡カトリック教会（馬場町7の19）に祀られる国内唯一の大型木彫「黒い聖母」像（彩色、像高143cm）に関する、私の第2次調査・研究報告である。これに先立つ第1次報告は、本学に於けるシンポジウム『海を渡った黒い聖母～フランスから鶴岡へ～』で発表し（2007年7月14日＝『聖母像の保存修復シンポジウム報告書』（2008年11月）所載＝pp.20-31）、また、稿をあらためた「鶴岡＝デリヴランドの黒い聖母像～造形と歴史～」(本学紀要第15号＝2008年3月、pp.48-57)で公にした。鶴岡の他に、フランス各地（2007年3月＝パリ、シャルトル、ロカマドゥール、トゥールーズ他）で黒い聖母像を追跡した第1次調査のあとには、ノルマンディー地方（カン、バイユー、デリヴランド、サントーバン）、パリ、オルレアン等で調査を重ねる機会を得て（2008年8月）、現地での見聞と資料収集をすすめ、私にはあらたな知見もあった。

鶴岡カトリック教会の聖母像は、聖母が正面向き立像で、右腕で御子イエスを左胸前に抱き、全身を覆う着衣（木彫・彩色のマントとチュニカ）の間から露出する、聖母およびイエスの顔面が、ともに褐色に塗られた「黒い聖母」である（図1、2、3）。もともとフランス北部ノルマンディー地方の聖母の聖地（ドゥーヴル・ド・ラ・）デリヴランドから、中世に遡る原像（伝説的記録によれば、はじめ7世紀。1030年あるいは1130年頃に聖所の土中から奇跡的に発見）が、16世紀の間の破壊（1561年）、その後再生（石造・彩色・像高123cm＝1580年）された。その石彫聖母像が、19世紀末に木彫や石膏でコピーされ（6体＝1895年頃）、その模刻木彫像のうちの1体が、海を渡って、私たちの鶴岡まで送られてきたものであった。



図1 鶴岡カトリック教会外観



図2 鶴岡カトリック教会の黒い聖母



図3 鶴岡カトリック教会の黒い聖母（2008年の修復以前）

そもそも、カトリックの極東地域の布教を目的とした、フランスの教区付き司祭の宣教会組織、パリ外国宣教会（Société de Missions Etrangères de Paris＝通称パリ・ミッション）から派遣され、1885（明治18）年に鶴岡の初代主任司祭となって、酒田・鶴岡地区のカトリック布教につとめたダリベル神父（1860コーヴィル生～1935年鎌倉没）が、鶴岡に聖堂の創建を立案し、その堂内に納める目的で、出生地のノルマンディー地方のセヌ川河口の町コーヴィルに近い、中世以来の聖地デリヴランドに聖母像の送付を申し出て許可されたのが、鶴岡への黒い聖母像伝来の経緯だった<sup>（註1）</sup>。

遠く海路送られてきた黒い聖母像は、聖堂献堂以来（1902＝明治35年6月着工～1903年10月竣工、10月11日献堂式）、当初から鶴岡カトリック教会の南側廊に向かう副祭壇上に安置され、そこで100年以上にわたって人びとの崇敬の祈りを受けつづけ、今日に至っている<sup>（註2）</sup>。



この間、随所に経年の劣化が生じていたのを、本学の文化財保存修復センターが調査および修理・修復の依頼を受け（2006年）、入念な科学的分析・診断を行ったうえで修復作業を施し、完了後に鶴岡カトリック教会に戻された（2008年4月3日＝『聖母像の保存修復シンポジウム報告書』（2008年11月）に調査、修復の詳細が記載される）。現在も現地の堂内で、保存環境の調査と改善の対策が継続されている。

以下、本稿は、おもに2008年8月のフランスでの第2次現地調査にもとづいて、もともとのデリヴランド聖母像について論じる。まず、1.「黒い聖母」にまつわるさまざまな謎のなかでも、とくにその起源に関する問題めぐって、遺作諸像をあげながら具体的に見る。その後、2. 聖地デリヴランドの歴史を追跡し、その黒い聖母像の来歴と再生について、ノルマンディー・ゴシックの伝統的聖母像表現との比較もまじえながら検討する。

## 1. フランスにおける黒い聖母の起源

大多数がフランス国内に由来して残るVierge Noire黒い聖母彫像に関しては、デュラン＝ルフェーヴルの博士論文（1937年）を本格的研究のはじめとするが<sup>（註3）</sup>、1945年にサイヤンが、総合的著作のなかで「1550年頃のフランスにおける黒い聖母の所在地」として、161箇所を地図上にポイント・アウトした<sup>（註4）</sup>（図4）。その後の調査では、200点以上の遺作例があげられたり、また、1988年にはボンヴァンが、スペインやイタリア等ヨーロッパ各地に広がった作例も加え、より広範なリストを提出した<sup>（註5）</sup>。2000年にはカサーニュ＝ブローケが、数多くのカラー図版を掲載した著作のなかで、11、12世紀以降の作例140点以上に言及している<sup>（註6）</sup>。ともあれ、中世以来、夥しい数の聖母彫像が生みだされたヨーロッパのキリスト教世界においては、肌が黒色（あるいは褐色＝Morenita）の聖母像は、特殊な少数派グループを形成しているのである。その造像形式は、聖母が正面向きで（視線は厳かに正面を見据える）玉座に坐し、揃えた両膝のうえ、腹の前に、やはり正面向きの幼児イエスを抱いた、いわゆる「荘嚴の聖母」（崇敬の聖者や天使を伴わない）タイプで、いかにも11、12世紀のロマネスク風のマッシヴで厳格な姿で表されているのを典型と

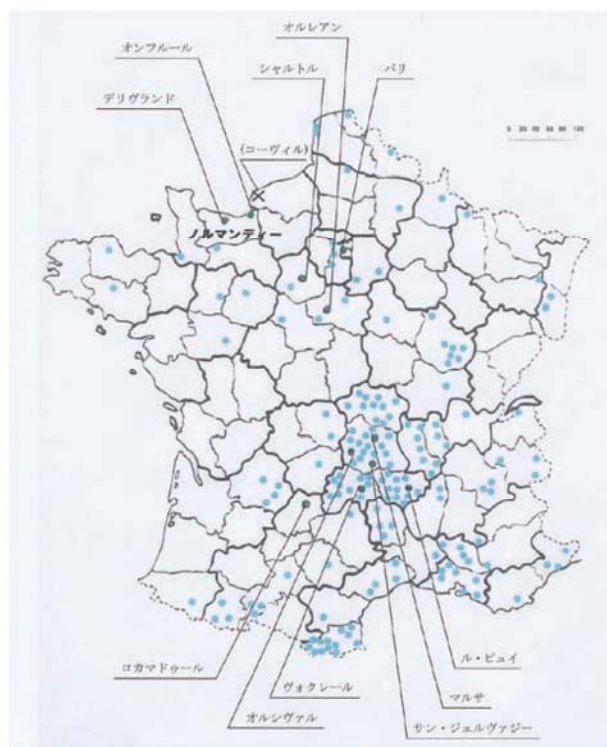


図4 サイヤンによる「1550年頃のフランスにおける黒い聖母の所在地」（地名は筆者が記入）

し、聖母、イエスとも肌の色が黒く、または濃い褐色で塗られている。

これら黒い聖母をめぐるのは、ほとんどの場合、初期や中世に遡る文献的資料が決定的に不足し、また伝説と歴史的記述が錯綜していて、事実がみきわめにくい。黒像であることの異教性の問題も警戒されてきたし、16世紀のいわゆる「宗教戦争」においては、プロテスタントからことさら攻撃目標とされて、資料的文献とも焼き討ち・焼却・破壊の憂き目にもあった。そもそも、幾世紀の間に、彫像自体の作り変え、隠匿、放棄、破壊、盗難、再生が行われていたのであり、また、模刻像の存在に加え、黒色の塗り直しや洗浄が繰り返されたことなども原因となって、現在でも諸問題の解決に多くの困難が生じている。像相互の伝播の経緯もはっきりとしないのである。

黒い聖母の彫像が、黒色（または褐色）であることやその意義に言及した記録にも問題がある。そうした具体的なドキュメントは16、17世紀以降に限られ、その数も決して多くなく、概ねそれらの言葉も簡潔なのである。ただし、たとえば17世紀の『シャルトル年代記』（ヴァ

ンサン・サブロン『シャルトルの威厳に満ちた、敬うべき聖堂の歴史の記』(1671年)のなかでは、聖母像の黒色について説明が付けられていて、「…実際、聖母の肌の色は、私たちには分からない。しかし、私たちは、霊的預言者ソロモンの『雅歌』に、「私は黒い。けれども美しい。」と書かれていることから、それを想像できる。ニケフォロス、聖ルカによる聖母の真の肖像が小麦色の肌であった、と証言しているのである。小麦が熟すと褐色や栗色に変色する。(黒色は)その色のことなのであろう…。」と記されていた<sup>(註7)</sup>。

つまり、聖母の黒色表現は、日焼けした肌の色に因むという訳であった。このような説明は、一説によれば、14世紀はじめ頃、聖ベルナルドゥスに縁りのあるテンプル騎士団の聖母に捧げる祈りの歌から発しているときれ、それが、とくに16、17世紀以降に喧伝されて、広く知られていたようである<sup>(註8)</sup>。とはいえ、その旧約聖書(『雅歌』第1章「おとめの歌」4～5＝5～6節)のなかの「Nigra sum, sed formosa, 私は黒いけれども美しい。ケダルの天幕、ソロモンの幕屋のように。どうぞ、そんなに見ないでください。(Quia) decoloravit me sol 日焼けして黒くなった私を。」という応答歌の一節が、そもそも黒い聖母像の黒色表現の直接的典拠になったという明確な証拠は、11、12世紀やそれ以前の文書や文献には見出されていない。

それで、「黒い聖母」像とは、もともとは存在しなかったとする説が強く主張されている。その実例の証拠として、たとえばしばしば言及されるように、ディジョンのノートル・ダム聖堂の堂々たる聖母(木彫《善き希望の聖母》＝12世紀第3分期・高さ84cm)は、1591年には黒色だった記録が残るものの、1945年の修復にあたって、黒塗りの下に12世紀のロマネスクの彩色が発見され、その後その黒色上塗りを洗浄して元に戻したのであった<sup>(註9)</sup>。また、率直な彫りだしで力強いヴォクレールの黒色聖母も、1954年の修復のときに洗浄して、当初の多色彩色をよみがえらせていた(木彫・12世紀後半・高さ73cm＝図5と6)。中世や近世以来の黒色を19、20世紀になって排除した例は意外に多いようである。さらにそれとは逆に、マルサの聖母像などは、1830年に黒色があらためて塗り直され、聖母像を「荘厳化」する着衣を覆う金箔も更新されていた(木彫・12世紀後半・高さ80cm＝5世紀以来の黒い聖母の伝説が残る＝図7と8)<sup>(註10)</sup>。



図5 (1954年の洗浄前)、6 ヴォクレールの黒い聖母



図7, 8 マルサの黒い聖母

いずれにしても、こうした作品の場合、聖母像の黒色に関して、「歴史的経緯」を尊重する立場からの仮説が立てられてきた。すなわち、もともとロマネスク的な多彩色で上塗りされていた彫像に対して、その直前に寄って崇敬の祈りを捧げる人びとが、長年にわたって、絶え間なく、さかんに灯明をかがげ、香を焚いていたのであり、その煤や油煙で聖像が汚れ、黒ずんでいった。それを、信仰の歴史、またその証しとして尊重し、あらためて黒色で上塗りしていったと推測されたのであった。そのとき、ヴォクレールの他、いかにもロマネスク風の厳肅さを宿すサン・ジェルヴァジエの聖母(12世紀後半・高さ81cm＝図9と10＝20世紀中に盗難・散逸)や身体表現が生々しく、表情に凄みすら感じさせるロカマドゥールの聖母(1166年頃・高さ76cm＝図11と12)<sup>(註11)</sup>のように、





図9、10 サン・ジェルヴァジーの黒い聖母



図11、12 ロカマドゥールの黒い聖母

聖母の肌の色ばかりか、御子ともに着衣や聖母の座る玉座にまで、彫像全面にわたって黒塗りすることにもなったのである。このようなもともと謙虚な信仰心から生じた「黒い聖母」は、年を経るにつれて神秘性を深め、人びとの崇敬がますます集中し、数々の奇蹟の伝説も広められると、祈りを捧げる巡礼たちが後を絶たなかったのである。

とはいえ一方で、ルフェーヴルやサイヤン以来、黒い聖母の起源や黒色の意味にまつわる関心が、キリスト教以前の古代宗教に向けられる傾向も根強くある。なかでも、古代エジプトのイシス女神が問題とされた<sup>(註12)</sup>。冥界神オシリスの妃イシスへの信仰は、古代ローマ時代にフランス＝ガリアにも伝えられ、各地で豊穡神、東方のアルテミスやギリシアのデメテルなどと「習合」され

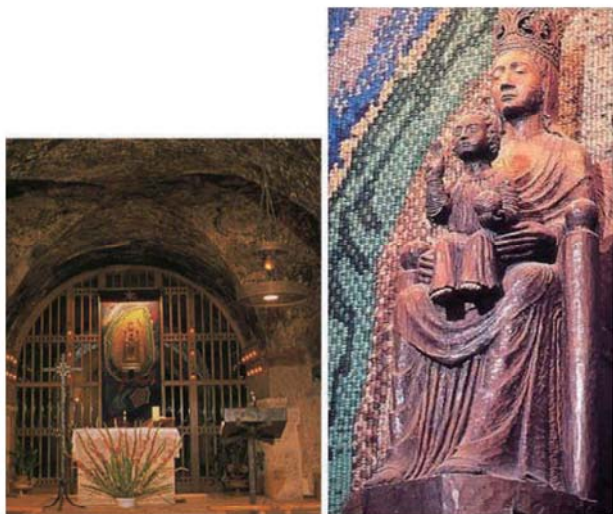
て、大地の豊穡の神、死者と冥界の支配者など多様な神格をおび、作物を生産する地中の暗闇、光のない冥界などの黒色の世界と深く関わっていた。台座に正面向きで坐すイシスが、幼児の息子（＝太陽神ホルス）を、揃えた両膝のうえに抱き授乳する図式は、多産・豊穡・発育の祈念像として、黒色石で彫像とされた作例が何点も残されている（図13）。そして、そうした古代以来の彫像が、キリスト教に取り入れられて、黒い聖母に作り変えられ、長期間、崇敬の祈りを受けつづけてきたと推察できる事例があったことは、かねてより報告されている。たとえば、パリヤル・ピュイ、マルセイユなどでは、古代ローマ時代にイシス信仰が及んだことがはっきりしている。いずれもももとの「黒い聖母」像自体は失われてしまったが、そもそもイシス神殿跡に設営されたといわれる、パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院聖堂の黒い聖母は、1514年の記録では「すらりとした、ほとんど裸身」の姿であり、修道院長ブリソーネによって異教のイシス像と断定されて、強烈に忌避されて焼き捨てられたという<sup>(註13)</sup>。もとより、広く、古代末期に作例を残す幼児ホルスに授乳するイシス像にキリスト教の「荘嚴の聖母」のプロトタイプをみとめる傾向もあった<sup>(註14)</sup>。ともあれ、作物を育む地中世界、生命を生みだす根元的な闇のシンボルである「黒色」をおびた大地母神イシスが、黒い聖母の遠いルーツのひとつとされてきているのである<sup>(註15)</sup>。



図13 ホルスを抱き授乳するイシス



この《地下の聖母》は、1793年のフランス革命で聖堂前に引き出されて焼かれてしまっていて、現在の聖像は1857年に復原・再生されたものである（木彫・彩色＝図14と15）。焼失以前の旧作は、残された18世紀初めの版画でも確認されるように、おそらく12世紀後半頃からそ



のような「莊嚴の聖母」タイプであった (Lereaux ルローのサインのある版画=1680～1712年頃=図16)。17世紀の複数の年代記には、「我らが救世主降誕の100年前から」(1609年)、「聖母の生まれる2世紀前から」(1664年)、「聖処女が生まれる3、400年以上前から」(1682年)、「ドルイドの魔術師たちが」「未来の聖なる、神の子の母像」としてこれを礼拝していた、と記されているのである。そして、サブロン『シャルトルの威厳に満ちた、敬うべき聖堂の歴史の記』(1671年)<sup>(註17)</sup>には、この《地下の聖母》は、もともとキリスト教以前のガロ(ガリア)・



ローマの先住民族ケルトの時代から、森や泉、巨岩など自然に聖性が宿るとする、アニミズム的なドルイド教を奉ずる「われわれの祖先が祀っていた」ものであったと記された。つまりケルトの人びとが、すでにそこあった「キリスト教の黒い聖母像」(＝《地下の聖母》)を借用し、それを自分たちの大地母神像として、聖域の洞窟のなかに安置して礼拝していたというのだった。実際、シャルトル地下のこの礼拝所のすぐ奥には、「殉教者の泉」として尊ばれる井戸が残されていて、それはかつて3世紀頃以来「サン・フォール(＝強き者)の井戸」と呼ばれていたドルイドの聖なる泉だったのであり、それが、ここがドルイドの聖域であったことの証拠となっている。またこのサブロン『年代記』の記述内容に一致する17世紀初めのRoulliard ロリヤールの版画がシャルトルに残されている(1609年＝図17)。そこに表されているのは、ドルイド信仰の聖域である「聖なる森」に囲まれ、「聖なる泉＝井戸(銘文：強き者の井戸)」の傍らに「祭壇(銘文：ドルイドの祭壇)」をしつらえ、後方の聖なる「洞窟」のなかに、幼児を抱く聖なる母の彫像(黒色でなく、またいかにも17世紀的なキリスト教の聖母像のように描かれている)があり、その前でドルイドの神官たちが祈りを捧げている。聖像頭上のラテン語銘文Virgini Pariturae(主格はVirgo Paritura)は、「産みだす処女」の意味で、処女にしてイエスをみごもり、出産し、その





図17 シャルトルの《地下の聖母》を表したロリャールの版画（1609年）

後も処女であったキリスト教の聖母マリアを指すのである（註18）。

まちがいなく、キリスト教的『年代記』の記述は、「歴史的事実」としては、順序が逆なのであろう。つまり、このVirgo Paritura像は、もともと、播かれた種を実らせ、収穫をもたらした耕作地をまた「処女地」に戻し、次の年にもあらたに種を播いて作物が産みだされる、という「大地の生産の営為」をシンボリックに示す母なる大地の女神、ケルト＝ドルイドの大地母神を指すのであったのであり、かつてそこに、毎年、五穀豊穡を祈念するドルイドの大地母神像があったのを、4世紀頃にシャルトルにキリスト教が伝えられたとき、シャルトルのキリスト教徒たちがそれを引き継ぎ、以前の聖域内に建てた新聖堂の地下祭室に聖母像として祀ったということであっただろう（註19）。

土着の大地母神でガロ・ローマ時代（紀元1～3世紀頃）の遺例は、いくつかのタイプにわけられ、玉座に坐す大地の女神が、男女ふたりの幼児を抱き、授乳して育てる像だった（註20）（図18）。幼児は、大地母神が産みだす子らであると同時に雌雄交配のシンボルだった。「授乳」表現にかえて、母なる神の膝のうえに、産みだされた作物の象徴である男児像を置くものもあった（図19）。こうしたケルトからガロ・ローマ時代のガリアの「母子像」が、キリスト教の時代になって、イエスを出産する聖母、

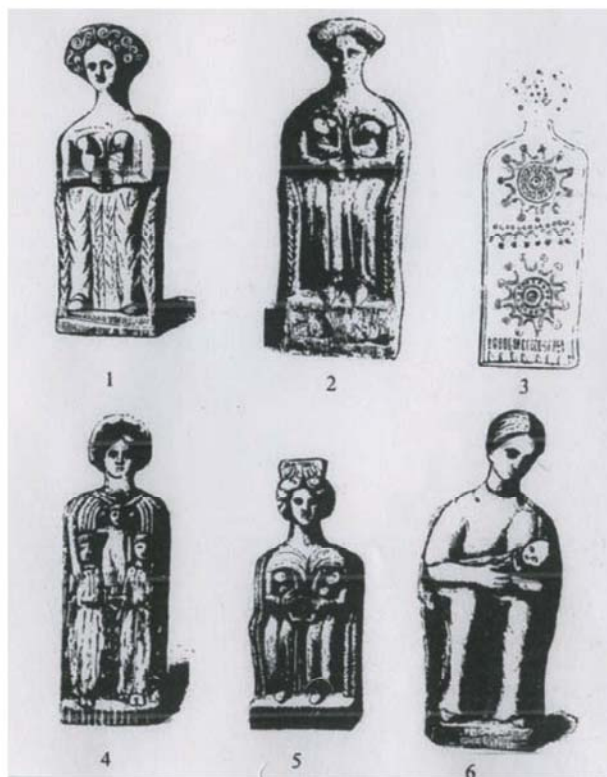


図18 ガロ・ローマの大地母神像



図19 ブルネイ・ル・ジロン出土のガロ・ローマの大地母神像

またキリスト教の信徒を恒常的に産みつづける「教会のシンボル」としての聖母の像として受け継がれ、変成されていったとも考えられるのである。こうしてみると、広く11、12世紀以降の玉座につく「莊嚴の聖母」像のプロトタイプとして、イシス像の他に、ガロ・ローマ以来の大地母神像をあげることもできる。ただし、それが、古代の黒色像から「黒い聖母」像へと変成された経緯については、個々の場合に慎重に検討されなければならない。

## 2. デリヴランドの黒い聖母

さて、以下では鶴岡の模刻聖母像の元であるデリヴランドの町と黒い聖母像について見てゆこう。(ドゥーヴル・ド・ラ・) デリヴランドは、パリの北西、ノルマンディー地方の中心的一都市カンから海に向かって10キロ程の所在で、海辺の小町サントーバン(・シュル・メール)まで3キロである。その町の名前Délivrandeが、ケルト語源のYv=河川、Rand=果て、つまり「川の果ての所」に由来する、すなわちケルト以来の集落である<sup>(註21)</sup>(図20)。郊外に(図20左方面)「神聖な森」Lucus(=もとLuc)サン・ルーカスを擁し、近在の(図20右方面)サントーバンでは、ガロ・ローマ時代の堂々たる石造の「大地母神」像が(紀元1世紀頃・座像の高さ140cm=図21。両側の男女の幼児像は欠損。膝のうえ、腹の前にも男児像があったのも失われている)、1943年に町なかの井戸から出土していて、この地域にドルイドの信仰がおよんでいた証左となっている<sup>(註22)</sup>。

残された文献によれば、デリヴランドにキリスト教が伝えられたのは7世紀初めであった。そのとき聖母に捧げる聖所が創設されたとされる。17世紀のデリヴランドの年代記作者は、この聖所にすでに聖母像が安置されていたとしている。そして、その像が、9世紀、ノルマン人の破壊的侵略のときに、地中に埋めて隠されて難を逃れ、1030年あるいは1130年の聖所再興のとき、奇跡的に羊によって掘り起こされて発見されたと付け加えて、それが、巡礼を集めるデリヴランドの聖母像伝説の始まりだったと記している<sup>(註23)</sup>。

一般的には、このロマネスク時代に、新たな聖母像が再生されたといわれている。デリヴランドの聖母には、

「死産の赤子のよみがえり」や「海での舟人の水難救助」など、さまざまな奇蹟をおこした伝承があって、《救難の聖母》の尊称が与えられていたという。奇蹟の記録としては、「アラブ人異教徒に捕らわれたノルマンディー



図20 デリヴランド遠望



図21 サントーバン出土のガロ・ローマの大地母神像



の商人の解放」、「客舎家の改心の物語」が残されている。また1832年には、デリヴランドを襲った伝染病コレラを、黒い聖母像を先頭にかかげたプロセションが鎮めたとされている。今日に伝わる数少ない中世デリヴランドに関する記録のなかでは、13世紀以来、聖王ルイをはじめとするパリからの人びとに加え、海を渡って来たイングランドの人びとの名前が、巡礼記録に見られた。15世紀のフランス国王ルイ11世は、とくに黒い聖母に執心した王で、国内各地の黒い聖母の地を表敬訪問していたし、自身の墓も黒い聖母を祀るクレイリーに造ったのだったが、1470年9月8日（聖母の誕生日）、3年後の1483年8月15日（聖母の昇天日）と、再度、一年のうちでもっとも大事な聖母の祝祭日に、わざわざデリヴランドに巡礼して、大金や豪華な典礼用の物品を寄進していた。はたしてデリヴランドの聖母像が、いつ頃から「黒い聖母」であったのかは明らかでない。早ければ11（12）世紀の再生時から、また遅くとも15世紀には、「デリヴランドの黒い聖母」の名が広く知られていたにちがいない。ともあれ、中世を通して、デリヴランドは、聖母の聖地としての令名が高かったのであった。

それでも1824年頃の版画を見ると、当の聖母像を納めたデリヴランドのノートル・ダム聖堂は、小規模な単身廊構造で、いかにも町はずれの慎ましい建物にすぎなかった（図22）。現在の聖堂は、1854年から40年をかけて、全体をネオ・ゴシック風に造り変えたもので、このとき、東側にあった司祭館を統合して広い合唱隊席を設けて内陣を拡張、ひとつづきの天井を高くし、交差部の南北に、遠くからも望める高い鐘塔を建てた。とくに内陣部は、直前に修復されたパリの王室礼拝堂サント・シャペル（1847～1867年）をモデルにしたといわれるが、それでもデリヴランド新聖堂の内部は、やや粗雑な空間で、今



図22 デリヴランドのノートル・ダム聖堂を表した素描（1824年頃）

も「貧しい魚村の女たちが祈る」のに相応しい聖堂（1836年にデリヴランド聖堂を訪れた文豪ヴィクトル・ユゴーの言葉）という印象を与える（註24）（図23、24、25）。



図23、24 デリヴランドのノートル・ダム聖堂

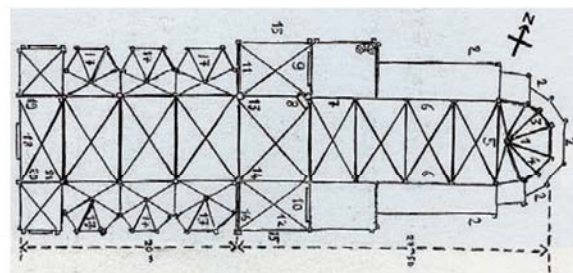


図25 デリヴランドのノートル・ダム聖堂  
19世紀の新聖堂の平面図

デリヴランドの黒い聖母は、聖堂内の主祭壇のそば、交差部の北側隅に副祭壇を設け、そこを飾る壮麗な祭壇衝立（もと1628年の作を19、20世紀に増補。付けられた聖人彫像＝「天上の教会」と司教、王、囚人、病人彫像＝「地上の教会」を表す）の中央のニッチに納められている。聖像は、8月15日の祝祭日には、それに相応しく、格別華麗な絹製純白のマントとローブを身に纏う（図26＝2008年8月14日撮影）。もともと、とくに黒い聖母像の場合、おそらく13世紀以来のシャルトルをはじめとして、聖像に別誂えの布製のローブとマントを着せて、像を「荘厳化」することが多かった。デリヴランドでも、17世紀以降には豪華な衣装が次々と寄進され、像は着衣の状態で祀られるのが恒常化していたのである（註25）（図27）。





図26, 27 デリヴランドのノートル・ダム聖堂の黒い聖母

衣装を取り外した元来のデリヴランドの聖母は、石彫彩色の重厚な造像で（高さ123cm）、金箔を貼った長髪の聖母は、左足に重心をかけて立ち、右腕で胸前に幼児イエスをしっかりと抱きかかえ、左手でその右足を支えている。重たいマントが、どっしりとした下半身を包んでいる。同じく輝く髪で裸体のイエスは、右手で聖母のマントの端をつかみ、左手を聖母の肩に回して、のけぞるようにして前方に視線を送っている（図28）。褐色が黒ずむ肌の聖母は、前方を直視する視線に凄みがあつて力強いが、全体に荒々しく、表情は硬く、厳しい<sup>（註26）</sup>（図29）。

もとよりこの聖母像は、そもそもの中世に遡る遺作ではなかった。デリヴランドの教会は、16世紀の宗教戦争のさなか、1561年5月にプロテスタント＝カルヴァン派の人びとによって襲撃され、そのとき中世からの聖像は破壊された。1564年に聖堂内での聖像復興をうたったカトリックのトリエント教令が發布されたあと、1580年2月20日に、デリヴランド教会の参事会員で彫刻家のピエール・ル・ジャルダンが、新像を造って聖堂に納めたのだった<sup>（註27）</sup>。その作が今日まで伝わっているのである。

カトリック教会の改革を標榜したプロテスタントは、聖堂内での聖母像、とりわけ異教的伝説と雰囲気をとどめる黒い聖母像の前での祈りと崇敬を、「野蛮な迷信」として強く敵視し、北フランスをはじめとする一帯の各地で、黒い聖母像の焼き討ち・破壊におよんだのだった<sup>（註28）</sup>。結局、この時破壊されたデリヴランドの聖母のかつての彫像の姿は、文献にも版画の類の記録も残らず、もはや私たち



図28 デリヴランドの黒い聖母



図29 デリヴランドの黒い聖母

には判然としない。ただ、19世紀に発見された、15世紀のデリヴランドに因む作とみなされる、十字架の中央部メダイユ（鉛製）の刻印を見ると（図30）、そこでは「ラッパ



を吹く牧人」と「羊（土中の聖母像を奇蹟的に掘り出した伝説の羊）」を従える聖母が、正面向きで玉座に坐し、両膝のうえに幼児イエスを抱く「荘嚴の聖母」の姿で表されていて、デリヴランドの聖母彫像が、もともとはこのタイプの造像であった可能性を示唆するとされている<sup>(註29)</sup>。実際、ノルマンディーにもロマネスクの「荘嚴の聖母」タイプの重厚さをとどめる聖母像は、ロゼーの木彫像のような作例を残しているのである（13世紀末＝図31）。



図30 「デリヴランドの十字架」鉛製 中央メダイユ



図31 ロゼーの聖母

ところで、再生後のデリヴランドの聖母は立像であった。実は、石彫でも木彫でも高さ100cmをこえる「大型の立像」黒い聖母の残存作例は、ノルマンディーに限らず、フランス国内でも数少ない（おそらく10体ほどである）。そのうち、かつてパリのサンテティエンヌ・デ・グレ聖堂にあった、いわゆる「パリの黒い聖母」は（14世紀＝図32）、頭部をやや傾けて、左腕に抱く幼児イエスに視線を向けている。体重を左脚にかけ、右脚を遊脚としてやや腰をひねる姿勢（＝デアンシェ）が、いかにも自然主義的で優美なゴシック風の造像であった。



図32 パリの黒い聖母

そもそも聖母立像彫刻は、ゴシック時代に大規模化された聖堂の柱を飾る彫像として、13世紀前半から半ばのフランス北部に現れた。ランス（1230年頃）やアミアン（《黄金の聖母》＝1250年頃）の他、パリのノートル・ダム大聖堂の西正面・北側扉口の中央柱には、正面向きで、やや腰をひねって幼児イエスを左胸に抱く、柱の形状にそったすりとした姿の聖母立像が設置され（1210－1220年頃・革命で破壊されたのを19世紀に復原＝図33と34）、パリの王室礼拝堂サント・シャペルには、同様の

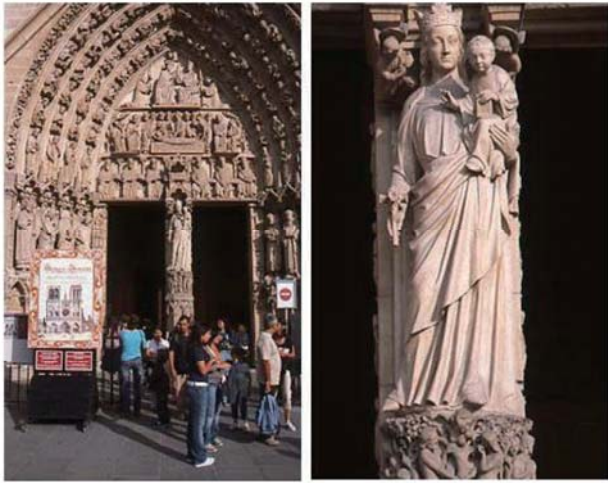


図33, 34 パリのノートル・ダム大聖堂西正面北扉口  
中央柱に聖母立像

造像の象牙小像が奉納されていた（1250年・高さ14cm＝図35）。また王妃ジャンヌ・デヴルーも、聖母の優美なデアンシェの姿勢、聖母に甘えるような幼児イエスとも、当時のパリ王宮工芸の秀作といわれる銀製金鍍金の小像を作らせて、サン・ドニ修道院に寄進していた（14世紀前半・高さ68cm＝図36）。こうした作品群を模範として、この後フランス各地で、祭壇上に置く独立した丸彫りの聖母立像が、さかんに制作されることになった。



図35 サント・シャベルの聖母



図36 ジャンヌ・デヴルーの聖母

ノルマンディー地方のゴシック彫刻は、はやくも13世紀後半過ぎから新傾向があらわれ、百年戦争がおこった14世紀の「危機の時代」をこえ、15世紀に最盛期をむかえた。常にパリからの影響を強く受けながら展開されて、その傾向が16世紀までつづき、その間、数多くの聖母立像が作られて残されている<sup>(註30)</sup>。たとえば、メンヴィルの石彫では（14世紀はじめ・高さ160cm＝図37）、厳しさをとどめる表情の聖母が、自然なデアンシェの姿勢を示し、イエスも幼児らしい動きをみせて、人間らしさに近づいているのが、この時代を通じての新たな特徴的表現であった。また、アマイエの石彫聖母は（16世紀はじめ頃・高さ133cm＝図38）、デアンシェが控えめで、全体に、ロマネスク風の厳格で充実した形体が荘嚴な雰囲気を漂わせている傑作だが、聖母が右腕で玉座を作るかのようにして、しっかりとイエスを抱くのは、デリヴランドの聖母と共通するポイントであった（図29参照）。こうしてみれば、デリヴランドの聖母像が、厳格な表情で、多少ながらデアンシェの姿勢をとり、また抱かれたイエスに人間的動きがみとめられるのは、ノルマンディー・ゴシックの聖母像表現につらなる特徴であったといえる。

さらにデリヴランド近在には、2体の16世紀の黒い聖母立像が残されていた。金箔に輝くオンフルールの聖母では（ノートル・ダム・ド・グレース聖堂＝図39）、ほとんど裸身の幼児イエスが、両腕を上挙げて開き、前





図37 メンヴィルの聖母

方に身体を傾けているのが、「罪ある人びとを赦して受け入れるキリストの愛」を強調したカトリック的な表現だった。また、15世紀の英仏戦争のとき、ジャンヌ・ダルクも最後の攻防戦にあたって戦勝の祈りを捧げたと言われる、オルレアン黒い聖母石造立像は（サン・ポール聖堂の《奇蹟の聖母》＝高さ130cm＝図40）、より落ち着いて厳粛な雰囲気聖母が、先程のアミエの聖母と同様に、右腕と左手で「玉座」を作って裸体のイエスを抱いている（イエスは左手を聖母の右肩に添える）。それも含めて全体に、オルレアン聖像はデリヴァンドの聖母の造像にとりわけ近いのである。もともとオンフルールやオルレアン聖母は、デリヴァンドと同様に、16世紀



図39 オンフルールの黒い聖母



図38 アマイエの聖母



図40 オルレアンの黒い聖母

にプロテスタントの暴挙によって攻撃され焼かれたのを、同世紀末に再生した作であった<sup>(註31)</sup>。オンフルール（もと11世紀）、オルレアン（伝説では早くて8世紀とされる）のどちらも、やはり被災・焼失以前の聖像の姿はわからなくなっているが、これらとも合わせて考えてみれば、デリヴランドの聖母は、破壊・焼失後に、伝統的なゴシック風の構想で新たに作り変えて再生したものだったと思われるのである。

## おわりに

デリヴランドでは、1870年から3年がかりで教皇ピウスから勅許を得て、1872年8月22日に教皇特使のボンショアズ枢機卿、ルーアン大司教臨席のもと、この黒い聖母像自体に栄誉の冠を捧げる「戴冠式」が、各地からの巡礼を集めて盛大に挙行され、枢機卿が貴石で飾られた鉄製の大型冠を聖像の聖母と御子の頭部に被せた。晩課の祈りがあげられてから、戴冠した聖母像を先頭にした行列儀式＝プロセションがはじまり、町の大通りを練り歩いて、ドゥーヴルの古い「受難の十字架」まで坂をのぼり、そこから同じ道をデリヴランドのノートル・ダム聖堂にもどっていったという<sup>(註32)</sup>。こうした聖母像の栄光を讃える一大プロセションは、1895年8月22日の新聖堂の献堂式でも執行され、このとき、聖母像のコピーが、石膏像、木彫像あわせて6体制作され、そのうちの1体が、異国日本の鶴岡に向けて、送り出されたということだった<sup>(註33)</sup>。

私が調査に行った2008年夏には、デリヴランドのプロセションは、聖母帰天日の祝祭（8月15～17日）のクライマックスとされていた。前日の15日にサントーバン聖堂でミサと音楽祭が営まれたあと、16日の午前には、デリヴランドのノートル・ダム聖堂の「中庭」（巡礼宿泊所の広大な庭）で、デリヴランドに縁りのあるカナダ、セネガル等各地からの巡礼団も混じった200人ほどの信徒を前に、バイユー司教による「Couronnement 聖母戴冠」のミサが挙行された。午後3時には、聖堂西正面入口に御輿（天蓋なし）を据え、そのうえに黒い聖母の「行列用の模刻像」を載せて、プロセションが始まった（図41）。白い盛装の司教、司祭たちを先頭に、御輿の聖母に従って、300人以上に増した信徒たちが道幅いっば



図41 デリヴランドのプロセション（1）

いに広がり、列をなして進むのである。行進の人びとは、聖堂前からゴール大通りを行ききって、町の入口の十字路を曲がり、数百メートルの道行き of 末に聖堂「中庭」を終着点とした。行列行進の間は、参加者全員が、掲げられた聖母像を仰ぎ見ながら、絶え間なく「ダム・ド・ラ・デリヴランド」（デリヴランドの聖母讃歌）や「サルヴェ・レギナ」（聖母讃歌）を合唱して聖母を賛美して歩くのだった（図42）。2時間近くの厳粛なプロセションを終えた人びとは、群れをなしてあらためて聖堂内に入り、純白の絹製マントとローブを纏った聖母像の前に灯明をかざして跪き、長く深い祈りを捧げていた。

もともと黒い聖母を掲げたプロセションのはじまりは、オルシヴァルなどで見られるように、聖堂内に安置された聖母像を、復活祭後の聖木曜日に、当初の崇敬の聖所（墓所、洞窟、丘のうえ等「奇蹟の発見の場所」＝多くはドルイドの聖域であった）に戻そうとすることが





図42 デリヴランドのプロセション（2）

らはじまったといわれる。人びとは、各種の捧げものをさしだし、松明をかざし、ろうソクを絶え間なく灯して、かつての聖所で敬虔な「徹夜の祈り」を唱え、翌日の午後に聖像を聖堂に戻す行列をおこなった<sup>(註34)</sup>。とくに発生を13世紀半ば以前に溯るル・ピュイの8月15日のプロセションは、今日でも多くの巡礼や観光客を集める一大行事である。デリヴランドのプロセションは、中世からつづく儀式であったが、そもそもの聖像の奇蹟の発見場所＝現ノートル・ダム聖堂への追想の機会であり、慎ましやかさのなかに、聖母への深い崇敬の念と聖母像を尊重する伝統を守る気概が感じられたのだった。

#### 【付記】

本稿は、おもに2007年3月の第1次調査と2008年8月の第2次調査にもとづいています。第1次調査後の報告

「鶴岡＝デリヴランドの黒い聖母像～造形と歴史～」(本学紀要第15号＝2008年3月)および第2次調査後の学会発表「黒い聖母の伝来～ノルマンディーから山形へ～」(民族藝術学会63回東京研究例会＝2009年10月17日於早稲田大学)と一部内容が重なっています。また訂正したところもあります。この論文を、私の「黒い聖母」研究を導いて下さったお茶の水女子大学名誉教授柳宗玄先生に、深く感謝を込めて捧げます。本研究第2次調査は、2008年度東北芸術工科大学特別研究費の助成を受けました。関係各位に感謝します。

#### 註

- (1) 鶴岡カトリック教会とデリヴランドからの黒い聖母像模刻移管の経緯については、安發和彰(2008年)「鶴岡＝デリヴランドの黒い聖母像～造形と歴史～」本学紀要第15号。
- (2) 鶴岡カトリック教会献堂式における池田清秀の報告『公会教会友會誌』1903(明治36)年11月号等参照。萩原泉(1996年)『天主堂を仰ぎ見て』鶴岡カトリック教会刊(とくにpp.58-78)による。
- (3) M.Durand=Lefebvre(1937年)『Étude sur l'origine des Vierges Noires』Paris.
- (4) E.Saillens(1945年)『Nos Vierges Noires ～ Leurs origines』Paris., (3)(4)については、S.Cassagne-Brouquet(2000年)『Vierges Noires』Rodez.(地図はp.17)他参照。
- (5) J. Bonvin(1988年)『Vierges Noires ～ La réponse vient de la Terre』Paris., pp. 213-296 (Annexe II) には、全266体(散逸を含む)の「黒い聖母」の解説リストが掲載されている。
- (6) S.Cassagnes-Brouquet(2000年)『Vierges Noires』Rodez.この他、黒い聖母をめぐるのは、M.Trens(1947年)『Iconografia de la Virgen en el arte español』Madrid, J.Huymen(1972年)『L'énigme des Vierges Noires』Chartres, R.Oursel(1988年)『Vierges romanes』Zodiaque, R.Bermann(1993/1996年)『Réarités et Mysteres des Vierges Noires』Parisなどの著作がある。
- (7) Vincent Sablon『Histoire de l'auguste et vénérable église de Chartres』1671.,ch.vii.=cf. Irene Forsyth(1972年)『The Thron of Wisdom, Wood sculptures of the Madonna in Romanesque France』Princeton,pp. 107-108, Yves Delaporte(1965年)『Les 3 Notre-Dame de la cathédrale de Chartres』Chartres, p.26.
- (8) イアン・ベッグ(林睦子訳)(1994年)『黒い聖母崇拜の博物誌』(Ean Begg1985『The Cult of the Black Virgin』Arkana) p.44.
- (9) 柳宗玄(1986年)『黒い聖母』福武書店 pp. 37-39., Cassagnes-Brouquet pp. 98 etc.その他参照。
- (10) ヴォークレールの黒い聖母の洗浄についてはCassagnes-Brouquet pp.87-89.その他参照。マルサの黒い聖母の黒色更新についてはCassagnes-Brouquet pp.89.その他参照。

- (11) ロカマドゥールの黒い聖母についてはE.Rupin (2001年)《Rocamadour. Étude historique et archéologique》Paris.に詳しい。またロカマドゥールの黒い聖母の奇蹟譚に関してはrd.,E.Albe, J.Rocacher (1996年)《Les miracles de Notre-Dame de Rocamadour au xii siècle》に編纂され、詳しい解説が施されている。
- (12) ルフェーヴルやサイヤンの黒い聖母とイシスおよび東方の女神像との関連についての論説は、田中仁彦 (1993年)《黒マリアの謎》岩波書店, pp.72-121.で詳しく解説され、一部反論されている。またCassagnes-Brouquet, pp.140-150.その他を参照。
- (13) バリのサン・ジェルマン・デ・ブレ修道院聖堂の黒い聖母の忌避・破壊については、ベッグ pp.126-127., Cassagnes-Brouquet, pp.223-224.他参照。
- (14) アンドレ・グラバル (辻佐保子訳) (1973年)《ユスティニアヌス黄金時代》新潮社 (A.Graber (1966年)《L'âge d'or de Justinien》Paris) pp.173-181.その他。
- (15) 私は、痩身・細腕で乳房やふくよかな腹部が強調されたロカマドゥールの黒い聖母の原像が、遠くイシス像に起源をもつと考えている。
- (16) シャルトルの「地下の聖母」については、とくにDelaporte, pp.9-32.の他にForsyth, pp.105-112, 馬杉宗夫 (2000年)『シェルトル大聖堂』八坂書房 pp.62-69, 同 (1998年)『黒い聖母と悪魔の謎』講談社現代新書 pp.84-86.その他。
- (17) Delaporte, pp.9-22., Forsyth, pp.20-22, 105-112.
- (18) Delaporte, pp.10, 13., Forsyth, pp.105-107.
- (19) 註 (16) と同じ。
- (20) 発見されたガロ・ローマ時代の大地母神像についてはBonvin, pp.83-92.の他、田中 pp.125-179, ベッグ pp.133-176.などで「黒い聖母」に関わりながら詳しく述べられている。
- (21) デリヴランドの正式な地名は、20世紀に、かつての領地の呼称を戴いたDouvres de la Délivrandeとされた。なおDell-Yvrandeのdellは、サクソン語の「土地、所」を意味するという。Cf. J.Marie (1987年)《Hiatoire de Douvres la Délivrande jusqu'en 1870》Caen, pp.8-9.etc., M.le Tellier etc. (1999年)《Basilique Notre-Dame de la Délivrande》Caen, pp.7-8 etc., M.le Tellier etc. (2001)《Douvres la Délivrande-Tailleville》Caen, pp.4, 33.その他。
- (22) サントーバンの大地母神像についてはP.Vipard (2001年)《Guide-Musée de Normandie de Caen》Skira, pp.33-34.他。
- (23) デリヴランドの町の歴史については(註21)の文献の他にH.Batalie (2006年)《Sur les pas de la Vierge Marie》Montligeon, pp.29-32参照。
- (24) 信仰に揺れたユゴーは、ノルマンディーの旅の間に、デリヴランドに立ち寄り、ノートル・ダム聖堂での感動を妻アデル宛に書き送っている(1836年7月5日付け)。「愛しのアデル。デデヌとデデに、私が、あの子たちがここにいたらよかったのと思ったと伝えて欲しい。ここは、危険をおかして海の漁に出る、船乗りの夫の無事を祈って跪く、貧しい女たちがいる。私は、跪いたりしなかったし、女たちのなかに加わった訳でもないけれど、思わず祈りを捧げていた。獣の傲慢さを秘めた私でも、心の奥底から祈った。まだ誰にもわからない人生の荒海に漕ぎ出そうとしている、私のいたいけない、

愛しい娘たちのために祈ったのだ。祈りを捧げたい気持ちになるときがあるものだ。私はそれに身をまかせた。そして神に感謝…。」cf. Batlie, p.30他より (筆者訳)。

- (25) 鶴岡に送られた模刻像は、「着衣のまま」の原像を、「着衣ごと」彫りだした木彫像なのである。cf. 安發 (2008) p.52.
- (26) 鶴岡の模刻像の表情は、19世紀のよりネオ・ゴシック風の優美さをとどめている。cf. 安發 (2008) pp.50-51.
- (27) Marie, pp.83-85 etc. Tellier《Basilique Notre-Dame de la Délivrande》pp.14-15 etc.その他。
- (28) プロテスタント側の黒い聖母に関する見解と破壊活動については、とくにCassagnes-Brouquet, pp.212-218.他。
- (29) このメダイユについてはTellier《Basilique Notre-Dame de la Délivrande》pp.9-10, Marie, p.77.
- (30) ノルマンディー地方のロマネスクからゴシックへの彫刻様式の展開については、とくに《Chefs-d'oeuvre du Gothique en Normandie. Sculpture et orfèvrerie du xiii au xv siècle》展 (2008年6-11月; 於Musée de Normandie, Caen) のカタログ所載の以下の論文による。J.-Y. Marin《1204, la fin de l'aventure normande》, L. Grant《Aux origines du gothique normand》, B. Beranger-Menand《Trois siècles de sculpture gothique en Normandie (1200-1500)》。
- (31) オンフルールの黒い聖母についてはBatalie, pp.21-23.参照。オルレアンの黒い聖母についてはCassagnes-Brouquet pp.60, 213, 225., J. Leroy (1984年)《La tradition vivante Notre-Dame des Miracles. La Vierge Noire d'Orléans》。
- (32) Tellier《Basilique Notre-Dame de la Délivrande》pp.21-22.
- (33) 萩原『天主堂を仰ぎ見て』p.160, 萩原泉 (1996年)『神の子羊ー鶴岡カトリック教会略史ー』鶴岡カトリック教会, pp.221-222.
- (34) Cassagnes-Brouquet, pp.173-188., Tellier《Basilique Notre-Dame de la Délivrande》pp.21-22.

## 図版リストおよび写真出典

- 図 (1) 鶴岡カトリック教会外観 (2008年筆者撮影)
- 図 (2) 鶴岡カトリック教会の黒い聖母 木彫・彩色・高さ143cm 1580年の像のコピー デリヴランド1895年頃 (2008年筆者撮影)
- 図 (3) 鶴岡カトリック教会の黒い聖母 (2008年の修復以前) (2007年筆者撮影)
- 図 (4) サイヤンによる「1550年頃のフランスにおける黒い聖母の所在地」(地名は筆者補筆) (S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.17より)
- 図 (5) (6) ヴォクレールの黒い聖母 木彫・彩色・高さ73cm 12世紀後半 (S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.88, p.153より)
- 図 (7) (8) マルサの黒い聖母 木彫・彩色・高さ80cm 12世紀後半 (S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.82より) (R.Oursel【Vierges Romanes】fig.35より)
- 図 (9) (10) サン・ジェルヴァーゼの黒い聖母 木彫・彩色・高さ80cm 12世紀後半 (S.Cassagne-Brouquet【Vierges



- Noires】p.91より）(R.Oursel【Vierges Romanes】fig. 17より)
- 図 (11) (12) ロカマドゥールの黒い聖母 木彫・彩色・高さ76cm 1166年頃 (L'ATELIER DU REGARDより) (ASTELETより)
- 図 (13) ホルスを抱き授乳するイシス ルーヴル美術館(S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.149より)
- 図 (14) (15) シャルトルの《地下の聖母》 木彫・彩色 12世紀後半?の1857年復原(高野禎子【天国へのまなざし】p.69より) (ASTELETより)
- 図 (16) シャルトルの《地下の聖母》を表したルローの版画 1680～1712年頃 ウール・エ・ロワール古文書館(S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.81より)
- 図 (17) シャルトルの《地下の聖母》を表したロリヤールの版画 1609年頃(S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.134より)
- 図 (18) ガロ・ローマの大地母神像(J.Bonvin【Vierges Noires, la réponse vient de la Terre】p.86より)
- 図 (19) ブルネイ・ル・ジロン出土のガロ・ローマの大地母神像 石彫 サン・ジェルマン・アン・レイ国立考古学博物館(S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.133より)
- 図 (20) デリヴランド遠望(2008年筆者撮影)
- 図 (21) サントーバン出土のガロ・ローマの大地母神像 石彫 高さ140cm 1世紀末頃カンのノルマンディー博物館(AMNより)
- 図 (22) デリヴランドのノートル・ダム聖堂を表した素描 1824年頃(M.Le Tellier【Basilique de Notre-Dame de la Délivrande】p.10より)
- 図 (23) (24) デリヴランドのノートル・ダム聖堂(2008年筆者撮影)
- 図 (25) デリヴランドのノートル・ダム聖堂 19世紀の新聖堂の平面図(M.Le Tellier【Basilique de Notre-Dame de la Délivrande】p.37より)
- 図 (26) デリヴランドのノートル・ダム聖堂の黒い聖母(2008年筆者撮影)
- 図 (27) デリヴランドの黒い聖母(布製マントとローブを纏う)(ARTAUD)
- 図 (28) (29) デリヴランドの黒い聖母 石彫・彩色(髪に金箔)・高さ123cm 1580年に再生(個人撮影)
- 図 (30) 「デリヴランドの十字架」鉛製中央メダイユ 直径4.7cm 15世紀頃 ルーアンのセリーヌ・マリティーム考古学博物館(M.Le Tellier【Basilique de Notre-Dame de la Délivrande】p.10より)
- 図 (31) ロゼーの聖母 木彫13世紀末(C.Arminjon【Chefs-d'oeuvre du Gothique en Normandie】p.69より)
- 図 (32) バリの黒い聖母 もとサンティエンヌ・デ・グレ聖堂 石彫・彩色14世紀現ヌイイ(S.Cassagne-Brouquet【Vierges Noires】p.106より)
- 図 (33) (34) バリのノートル・ダム大聖堂西正面北扉口 中央柱に聖母立像 石彫・もと彩色 1210～20年頃/18世紀末に破壊されたのを1841年から復原(2008年筆者撮影)
- 図 (35) サント・シャペルの聖母 象牙・高さ14cm 1250年頃 ルーヴル美術館(2008年筆者撮影)
- 図 (36) ジャンヌ・デヴルーの聖母 銀に金鍍金・高さ68cm 14世紀前半 ルーヴル美術館(2008年筆者撮影)
- 図 (37) メンヴィルの聖母 石彫・彩色・高さ160cm 1310年以前(C.Arminjon【Chefs-d'oeuvre du Gothique en Normandie】p.75より)
- 図 (38) アマイエの聖母 石彫・彩色・高さ133cm 1500年頃(2008年筆者撮影)
- 図 (39) オンフルールの黒い聖母 木彫・彩色に金箔 もと11世紀の作(1538年焼失)を16世紀末に再生(H.Batalie【Sur les pas de la Vierge Marie】p.21より)
- 図 (40) オルレアンの黒い聖母 黒石彫・高さ130cm もと8世紀?の黒檀木彫(1562年焼失)を1589年に再生(J.Leroy【La tradition vivante: Notre-Dame des Miracles.La Vierge Noire d'Orléans】p.12より)
- 図 (41) デリヴランドのプロセション(1) 2008年8月16日(2008年筆者撮影)
- 図 (42) デリヴランドのプロセション(2) 2008年8月16日(2008年筆者撮影)

#### 執筆者

安發 和彰  
AWA Kazuaki

芸術学部 美術史・文化財保存修復学科  
School of Art/Department of Art History and Conservation  
准教授  
Associate Professor